

グリーンツーリズムに関する研究

－ドイツ、フランス、イギリス及び日本について－

日大生産工（院） ○小林 拓人
日大生産工 川岸 梅和

1. はじめに

今、農村地域の活性化が注目され期待されるものとしてグリーンツーリズム（以下G T）が挙げられる。G Tは1992年に農水省構造改善局より「グリーンツーリズム研究会中間報告書」が提起されて以来日本各地でG T基本構想の策定やG Tの受け皿づくりが進められてきた。農林水産省では「緑豊かな農山漁村地域において、その自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動」とG Tを定義し、それらの取り組みはG T先進国といわれる、ドイツ、フランス、イギリスの国を模範にしながら行われ、日本の文化や風土や日本人の志向に合わせ変化させながら進められており、日本型G Tと呼ばれている。

2. 研究目的

本稿では、ドイツ、イギリス、フランスのG T先進国と、日本のG Tの歴史的背景や、現状などを把握すると共に、比較分析を行い、各々の特性を明らかにすることを目的とする。

3. 研究方法

文献調査及びインターネットによる調査を行い、得られた資料を整理し比較を行った。

4. 調査対象地域概要

4-1. ドイツ

ドイツのG Tの始まりはドイツの南部地域とされており、この地域は、アルプス山脈に囲まれ農業を行う環境には適していない。また山岳地域を背景に酪農や畜産が盛んな地域であるが、過疎問題や嫁不足などの問題が顕著な地域でもある。そのような環境に対しバイエルン州政府は独特な農業政策を打ち出した。その内容は、欧州各国では大規模経営を基本としているのに対し、小規模経営を基本とし、農家間での協力を推進して、農業機械などの過剰投資を極力抑えていく方向を示すものであった。そのなかから農業や畜産とツーリズムを結び

つけていく方向が見いだされ、現在のG Tにまで発展してきた。

4-2. フランス

フランスは法定年次有給休暇制度^{*注1}が定められ、週休以外に有給休暇をとることが可能になると共に、その後法定年次有給休暇の日数は増加し、フランス人はバカンスをとる習慣が定着し、田舎で過ごす人も多くなった。そのため休暇を過ごすことのできる施設の需要が高まる一方、農村の建築物や文化は破壊されていった。それらを守ろうとする運動から、新しい観光が提唱された。それがG Tの始まりとされている。また1955年には非営利組織としてジット・ド・フランス全国連盟が誕生した。フランス国内の農村にある民宿が加盟できると共に、加盟民宿はフランス全土にあり、フランス最大の民宿ネットワークを構築しておりフランスのG Tを支えている。その後フランス国内にとどまらず国外の民宿も加盟でき、現在ではヨーロッパレベルの組織にまで発展している。

4-3. イギリス

イギリスでのツーリズムは、ヨーロッパのなかでも比較的早くから発展した。特に産業革命以降による都市の拡大や環境破壊が進んだ頃に農村の保全に対する関心が高まり、ナショナルトラストの設立にもつながった。それらはその後の都市計画法にも影響を与え農村の保全は厳しく実践され、それらが発展し現在のG Tになったとされている。

4-4. 日本

日本のG Tは1992年の農林水産省構造改善局構造改善事業課がグリーンツーリズム研究会の中間報告書として「グリーンツーリズムの提唱―農山漁村で楽しむゆとりある休暇を」と題した中間報告書を発表したことに端を発する。ここではじめてG Tという言葉が使われ、日本各地で様々な取組が行われているが、定着

Study on Green Tourism

－ Germany, France, United Kingdom and Japan －

Takuhito KOBAYASHI, Umekazu KAWAGISHI

するには時間がかかるとみられている。

5. 各国の比較

各国のG Tの比較を以下に述べる。

先ず、ヨーロッパ諸国では完全週休二日制、週単位の農村滞在を可能にする年次有給休暇制度が確立しているが、日本においては年次有給休暇制度が未確立でありかつ、労働時間が長く、年間総実労働時間^{*注2}が多いことがあげられる。このことからヨーロッパ諸国では長期休暇型のG Tが可能であるが、現在の日本では短期滞在型のG Tのみが可能であると言えよう。

次に、ヨーロッパの農家の場合、屋敷が広く、家屋の構造が石造りであることが多く、比較的簡単な改装工事でプライバシーの守れる快適な宿泊施設が提供できるのに対し、日本の家屋は木造が多く、開放的な空間構成を有している為、簡単な改装工事ではプライバシーを守ることができず、改装工事が大規模になってしまうことが挙げられる。

第3に、G Tの目的としていることに関して、ドイツの場合、概要でも述べたとおり、農業環境が適していないためにG Tを始める農家が多かったことや本業に支障をきたさないように、手間のかからないB & B^{*注3}の経営方式をとっている農家が多いということから、副業としてG Tを行っていると言えよう。しかし、近年ではさらに手間のかからない経営方式として、宿泊客が自炊できるようなスタイルの施設が増えてきている。

イギリスの場合、18世紀半ばから19世紀にかけて産業革命が起きた。その結果、都市化が起り、その一方で歴史的建造物の破壊、そして、大気汚染をはじめとした環境破壊を招き、イギリス人に田園都市・田園地域志向をもたらし、ナショナルトラスト等の設立などにまで発展してきた。従って、これらの活動からイギリスでのG Tの目的は農村の保全にあると言えよう。そのため、農村部におけるレジャー施設や観光施設等の開発は「都市農村計画法」において制限される一方、農村部の建物の改装の過程においても建物の持つ歴史的価値や景観上の重要性、改装目的の有意性、近隣のプライバシー、地域交通への影響などが厳しくチェックされる。

フランスの場合は概要でも述べたとおり、バカンス大国である。そのため農村の宿泊施設もバラエティに富んでおり、キャンプ場やバカンス村などといった施設にもG Tはみられる。従って、フランスのG Tの目的はバカンス環境の整備の一環と言えよう。

日本の場合は、「農村地域の活力が低下しており、国土の均衡ある発展を図るため、農山漁村地域を活性化することが求められている。」（グリーンツーリズム研究会中間報告書より）従って、日本のG Tは農山漁村地域の活性化が目的と言えよう。

以上のことより、ヨーロッパ諸国と日本のG Tの目的を比較すると、ヨーロッパ諸国では都市生活者の求めに応じて農村地域の自主的な取り組みによって生まれ、定着するようになったのに対し、日本では行政誘導型の構図と言えよう。

6. まとめ

ヨーロッパ諸国と日本を比較することで相違点が明確になった。また、日本に於いてG Tの受け皿作りは行政、関係団体、地域住民が一体となって行うことが重要であり、地域の活性化を図るためには地域住民の積極的な参加と協同（働）にもとづく活動として取り組む必要があると言える。

参考文献

- 1) グリーンツーリズム グリーンツーリズム研究会中間報告書 1992年8月
- 2) 日本型グリーンツーリズム 都市文化社 井上和衛、中村攻、山崎光博 1996年3月
- 3) 持続可能なグリーンツーリズム—英国に学ぶ実践的農村再生— 丸善株式会社 青山辰司、小山善彦、バーナード・レイン 2006年10月
- 4) 地域経営型グリーンツーリズム 都市文化社 井上和衛、中村攻、宮崎猛、山崎光博 1999年4月
- 5) グリーンツーリズム実践の社会学 丸善株式会社 青木辰司 2004年2月
- 6) グリーンツーリズム 家の光協会 山崎光博、小山善彦、大島順子 1993年5月
- 7) グリーンツーリズムの現状と課題 筑波書房ブックレット 山崎光博 2004年4月
- 8) ドイツのグリーンツーリズム 農林統計協会 山崎光博 2005年3月
- 9) グリーンライフ入門 農文協 佐藤誠、篠原徹、山崎光博2005年5月

*注1：雇入れの日から6ヶ月間継続勤務し、その間の全労働日の8割以上出勤した労働者に対して10日、（最高20日）の有給休暇を与えなければならない。出典：厚生労働省労働基準局 勤労者生活部企画課 関係資料

*注2：年間総実労働時間

	日本	イギリス	ドイツ	フランス
2007	1808	1655	1354	1468
2008	1792	1634	1351	1475
2009	1733	1630	1309	1469
2010	1754	1620	1340	1469

単位：時間

出典：レジャー白書 2012年

*注3：Bed and Breakfast の略で朝食とベットののみを提供する経営方法